

大声でつぶやく けったいな町医者

作家・医学博士 長尾和宏



悪いことが2日続いた。なんという始まりか。ただただ悼みます。

元日の能登地震。そして2日の日航機と海保の衝突事故。200人以上の地震の犠牲者と5人の海保の犠牲者に心から悼み、冥福をお祈り申し上げます。

地震と事故。どちらも避けられない。同じ国に生きる人間としては心の機能を失いトリアーが苦しい。救援に向かう海保の5人の死亡報道を聞いたとき、涙が

出た。ウクライナやロシアやハマスやイスラエルの死者と日本の死者を比べることはできない。

どちらも悲しいけれど、僕は助けに行く人の死に拘わる。29年前の阪神淡路大震災のとき、ボランティアが深江港で倒れて市立芦屋病院に運ばれた20代の若者がいた。

上司は受け持つの研修医に「放置しておけ」と命じた。でも、深夜に僕がその研修医に話しかけて、そんな患者の存在を知ったとき、慌てて病室まで診にいった。

助けられる命は助けたい

をして容態を話したらすぐに搬送してくれと言われた。深夜にそっと搬送した。

震災後10日目くらいにまだ大混乱の中の1コマ。果たして10年後そのとき電話に出た医師は教授に昇進したことを知った。

僕は開業医10年目。別の要件でその医師に電話で相談した際に話してみた。

「ところで阪神淡路大震災のときに市立芦屋病院から深夜に搬送した若者のことを覚えていますか」

「ハッキリ覚えていませんよ」

「助かりましたか」
「くも膜下出血でしたが助かりました。今も覚えています。あの時はありがとうございます」

「良かった…」

被災者も何人か助けられたい。被災者も何人か助けられたい。たけれどもボランティアも僕が助けた。

「ボランティアを死なせてどうなる！」という感慨があった。間違いない。僕がこの世にいなかったら彼は死んでいた。僕が

まだ36歳のとき。今の歳の半分だ。管理者の命令を覆したから、「明日クビになってもいい」という覚悟もあった。クビなんてくそくらえて感じ。

実は今、ワクチン後遺症のことをやっているのも「罪のない人が傷ついたなら俺が治す」という思いがある。コロナも同じ。そもそも「コロナなんかでひたすら死ぬなせへん」と

いう強い思いがあったし実践した。そして2冊も本を書いた。話が逸れた。助けられる命は多少無理しても助けたい。特に人のために尽くそうとした人は助けてあげたい。

その意味で海保の5人を想像するだけで涙が溢れてくる。そんなこと言ったら知覧や鹿屋の特攻隊には涙ちよちよ切れ。

能登にはまだ埋もれている人がたくさんいるはず。まだ助けられる人が瓦礫の下で生き延びている。掘り出し作業を徹夜でやっている自衛隊や地元消防団には大きなエールを送りたい。